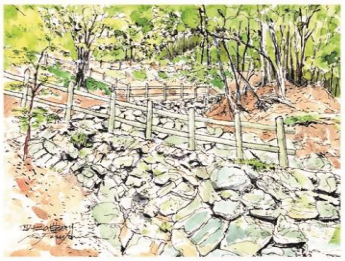
今日のイラスト 407　「 イラストでたどる萩往還㉒ 四十二の曲がり」　　古谷眞之助

萩往還は、萩を出発して板堂峠まではほぼ緩やかに上り、峠からは一気に下って山口に至り、そこから三田尻まではさほどきつくない鯖山峠を残すのみとなる。そのため、萩から歩けば、ゆっくりと最高地点まで上った後で一気に下ることになり、三田尻から歩けば、最高地点まで一気に上った後はゆったりした下りになる。どちらを選ぶかは歩く人の考え方次第だが、万一雨模様の時には、ここ「四十二の曲がり」は「上り」を選択されることを強く勧める。萩往還の復元整備工事が始まったのは昭和 52 年(1977)のことだが、その際に雨による道の倒壊を避けるためなのだろう、本来石畳は幅約 1m なのに、全面を石畳化してしまった。そのため、表面が濡れている時には、止む無く石畳上を歩くしかないので、一寸信じられないほど道は滑りやすいのである。ガイド中は何度も注意するのだが、必ず誰かが滑る。もし下りで激しく滑れば、下手をすると後頭部を石畳で強く打つことになる。過去雨模様の時にここを歩く時、予定が下りコースだったのを、敢えて上りコースに変更してもらったことが何度かある。雨模様の一の坂は「上る」に限るのである。以前、ヒマラヤトレッキング経験のあるベテランが、私の注意を本気にされずスリップして危うく後頭部を打ちそうになったことがある。全面石畳という復元方法は道の倒壊回避のためには仕方なかったのかもしれないが、正しく復元するという観点も含めて、残念と言わねばならない。

四十二の曲がりと言いながら、曲がり箇所は 42 以上ある。小学生には「さぁ、何回曲がるか数えてみよう」といつも言う。しばらく進んだところで、「しっかり数えてるね、ところで君は今何歳？」「〇〇歳です」「君は？君は？ そうか、ところで何回曲がったかな？」とやるのである。四十二とは男の厄年。難所のここを無事越えて厄払いをしてから萩の城下に入る、という意味もあったらしい。とっくにその歳は過ぎてしまい、今ではここを上るたびに息切れの度合いで年齢を感じているような次第である。（2021.1.26 記 ）

イラストでたどる萩往還 22　四十二の曲がり



文・イラスト＝古谷眞之助

板堂峠を越えて山口側に下る一の坂は、西日本一急な坂ということでその名がついたと言われる萩往還随一の難所である。このコラムは萩から山口方面へと進行しているが、山口側から登るとなると大変である。とりわけ九十九折りの続くこの辺りは四十二の曲がりと呼ばれ「ここは一の坂、四十二の曲がり、降りて下され旦那様」という駕籠かきの悲鳴の唄が残っているほどである。

イラストは特に急な所で、萩往還の中では、6年前の大河ドラマ「花燃ゆ」のロケ地に選ばれた二カ所のうちの一つ。残念ながらここで収録されたものは不採用となり、少し下った所で撮影された吉田松陰の長崎行きシーンが採用となった。